Artist 4

Masanori Hata
秦 雅則

滞在:2022年10月18日～11月2日
住まい:Eat&Stay どまどど
カウンターパート:日高みよし農園

約2週間という滞在期間ではあったが、農園でのお手伝いは3日間という短い期間だった。それでも、日常では経験することの出来ないかけがえのない時間を過ごすことが出来た。これまで参加してきたアーティスト・イン・レジデンスでは、アーティストとしての私だけが求められていたが、日高村でのアーティスト・イン・レジデンスでは、アーティスト×農家という自分自身でも想像が出来ない状態に身を置くことになり、最初は何を求められているのか、自分も何を求めていくのかが分からないという混乱もあった。しかしその混乱は、いつ何時に自分の立場が変わらざるをえない状況になるか分からないという現代の混乱に重なるものでもあると思った。いま仕事としているものが、何十年後も人間がやる仕事として存在しているか分からないAI革命や、何年後におこるか分からない自然災害による生活環境の変化、今後想定されている試練だけでも、これまで日常と思っていたことが一瞬で変わってしまうということは想像に難しくない。新種の疫病の流行により、この数十年では大きな都市機能の麻痺を経験した私達にとっては、想定されているもの以上の試練すらも考えておかないといけないだろうし、この現代をサバイブしていくために必要な準備というものは沢山あるのだと思う。全てが一つの正しさだけで動いていく時代ではないからこそ、自分自身で様々なことを直に感じられる、考えることが出来る機会として、このアーティスト・イン・レジデンスの混乱は面白いものだと思った。もうひとつ、今回のアーティスト・イン・レジデンスでは単純に都市的な暮らしだけでは経験できない農村的な暮らしを経験させてもらい、近年の地方移住のムーブメントの一端を垣間みることが出来たのも面白い経験だった。日高村は高知市の中心地から電車で30分、車で20分程度の立地の良い田舎であり、農村といっても中間地点にある場所だと思う。中心地へ通勤圏内であり、少し足を伸ばせば遊びにいける近所の田舎。なので移住しやすいという強みもあるだろうが、村政がしっかりと移住希望者、移住者へのフォローをしているという雰囲気が見受けられた。作業をお手伝いさせてもらった日高みよし農園の三好さんも東京から移住してきた方で、農園は二年目ということだが未来について楽しそうに話をし仕事に励んでいる姿が印象的だった。アーティスト・イン・レジデンスを利用して様々な土地に住むことを選んで約5年が経つが、国内外ではそれこそ様々なことが起こっている。その全てに当事者として関われているという感覚は持てないが、少しでも自分が場所を移動することで、新しい人々に会うことで、その人々や土地の持つ課題を知ることで、自分の生きている場所がどういうところなのか考えてきた。アートという言葉は人によって捉え方が大きく異なるが、自分にとっては生活や、それを営む私、関わる他人、その奥にいる多くの人々、小さなコミューンの暗黙の決まり事から国の制度、科学の進歩や、地球や宇宙の成りたち、視線を変えてみるだけで多くの興味対象が現れてくるということを教えてくれるものだと思っている。時として、小さな考えや行動が大きな意味へと繋がることもある。そういうことを頭の片隅に置きながら、日高村でのささやかな日々を過ごしてみた。

写真のイメージを用い、既存の価値観に矛盾や亀裂を引き起こす作品を制作する。
1984 福岡県生まれ／2009 企画ギャラリー明るい部屋設立／2012 出版レーベルA組織 設立/2017以降、AIRを利用し様々な土地を転々とする
展示歴:国内外にて個展・グループ展多数／受賞歴:写真新世紀グランプリ／コレクション:清里フォトミュージアム
主な出版物:「写真か?～秦雅則と鷹野隆大による対談集～(2013)」／「二十二世紀写真史～秦雅則と同世代作家35名による対談集(2015)」／「写真集・鏡と心中(2016)」／「写真集・ZOI&HEO(2019)」／「写真集・今日、心の中は怪獣の戦争(2021)」

Artist 5

Takayuki Tairyobune
大漁舟 隆之

滞在:2022年12月12日～12月28日
住まい:Eat&Stay どまどど
カウンターパート:日高みよし農園

何も決めず、東京と違う時間を日々過ごすことができた14日間の滞在でした。中でも滞在の軸にあった日高みよし農園での時間が印象に残っています。黙々と作業を行ない、休憩時間には椅子を出してお茶を飲みながら皆で談笑する。近過ぎず遠過ぎず、入りたければ入っておいでと適度な距離感で受け入れてもらえるような感覚がありました。自分が外からの視点を持ち込んでいることを踏まえたとしても、農園の方は不思議なくらい邪なものを感じさせない方ばかりで、冗談を飛ばし合う姿や、時にじゃれ合うような姿も鮮明に印象に残っています。朝出勤してビニールハウスの戸を開け、皆さんと挨拶を交わす時に、前の日の明るい時間がそのまま続いていることには日々ホッとする気持ちになりました。朗らかでありながらどこかシャイで、仕事に対しては真剣に向き合う姿勢をそれぞれの方から見せていただきました。機械を用いてコントロールを行うビニールハウスですが、その中で対話するようにトマトと向き合い、日々の観察と改良、美味しいトマトを作っていく覚悟を三好さんと話していて学びました。農園の皆さんの積み重ねと創意工夫がハウスのあちこちにあり、ツルおろしの工程の中にはパートの方が作ってきた木の棒を改良した道具が存在していたり、作業に必要なものがない時はあそこにあれがあったはずだ、と余った材料を適正なサイズに切ってあてがって使うような場面を度々目にしました。用意された便利に頼らず知恵を働かせて、工夫をして対応することがこともなげに行われていることに、恥ずかしながら感動して過ごしていました。本来当たり前のことなのかもしれませんが、それが案外自分の周りから見かけなくなって久しいなと、そんなことを思いました。余所者なので美化している部分があるかもしれないと自問しながらも、日頃自分が暮らしている場所での当たり前を疑って考える毎日でした。意識して特別な過ごし方をしたつもりはなく、基本的にはいつも通りのような暮らし方をした約2週間の滞在の中で出会った人や出来事は当面自分の頭から離れず、そこから学んだことは生活の中に知らず知らずに還元されるのではないかと思っています。また遊びにきてね、と色々な方におっしゃっていただき、AIR日高村のお陰でご縁ができ心強い限りです。

画家・映像作家。生まれは東京・中野。只今は青梅市在住。大阪芸術大学で映像を学び、以降は絵画作品と並行して映像を作り続ける。土偶や仏像などをモチーフとし、生と死、ミクロとマクロ、ざわめきと静けさなどのあらゆる相反するものの気配をあらわした「像」のシリーズの絵画作品、建築物や地図、細胞をイメージした細密画を制作。また手書きのアニメーションなどの映像制作も行なう。2016年「第六回　天祭一〇八」にて「増上寺現代コレクション」グランプリ受賞。2017年「福爾摩沙(フォルモサ)国際映画祭」(台湾・台中市)にてアニメーション作品「太平ナンバー」を上映。以降、個展、グループ展等で発表を重ねる。2021年に参加した「東京ビエンナーレ　2020/2021『アートユニット野営の東京大屋台』」より仮面制作も行う。手法にこだわらず実験を重ねながら、異星人が眼を剥くような作品を追求している。